

# アフリカ ケニアでの無料医療キャンプに参加して



臨床検査技師長 加藤 稔

アフリカには未だに医療過疎地が多く点在しています。無料医療キャンプは医療過疎地の住民に医療を届ける目的で毎年実施されています。医療チームは一般診療、検査、鍼灸、薬剤の4グループで構成されています。小職は検査の一員としてケニアでの医療キャンプに参加する機会を得ました。

2016/9/16(金)アフリカに向けていざ出発。中部国際空港から北京経由でアラブ首長国連邦の阿布ダビ国際空港へ。ナイロビ行きの便に乗継し、東アフリカの玄関ジョモ・ケニヤッタ国際空港に到着。20時間の長旅です。ケニアは北にエチオピア、南にタンザニア、東はソマリアと国境を接する自然豊かな国です。

到着日は薬剤などの必要物資を調達し、ナイロビで宿泊。翌朝ナイロビを出発しバスで西部の町キシイのベースキャンプへ300キロの移動です。キシイに到着すると現地協力団体と合流し、休む間もなく荷物・薬剤の整理や検査試薬等の準備を行いました。

アフリカはHIV/AIDSの流行地です。医療キャンプの目的の一つはHIV検査です。今回で7度目の無料医療キャンプを行うゲム・イースト村はケニア国内でもとりわけ医療が遅れており、特にHIV/AIDS罹患率が最も高い地域です。HIV感染率が高い要因は、医療・教育の不備、文化的背景（迷信、未亡人が夫の兄弟と再婚する習慣がある、割礼しない、女性の立場が弱い、漁師に対する売春が常態化している）が複雑に絡んでいます。



いよいよ5日間の医療キャンプの始まりです。ゲム村はベースキャンプからバスで1時間ほどかかる奥地にあります。村に到着すると、多くの村民が待っていました。診療が始まる頃には長蛇の列になっていました。村にはHIV/AIDSに対する無知、迷信、偏見、差別があり、これまでHIV/AIDSはタブー視されてきました。検査を受けるだけで、恐ろしい病気に罹っていると後ろ指を指されたのです。

今回は337名もの村人がHIV検査を受けました。これは診察をうけた26.6%にのびります。HIVの陽性率は4.2%でした（日本における総人口に占めるHIV陽性者の割合は0.017%、2014年統計より推定）。2010年には23%だった新規HIV陽性者が1/5に減少したのは大きな変化です。検査を受けた人の75%は過去に同様の検査を受けた経験があり、大多数が自分の感染ステータスを知っていました。感染ステータスを知っている人が増えた事も大きな進歩です。啓発活動が村の人たちの意識を変えたのです。



医療施設が認可されるためには、クリーンな水と電気が必要です。ゲム村では募金を実施して2014年から井戸の掘削を始めました。もうすぐ電気が使えるようになるそうです。近い将来、ヘルスセンターを設立して恒常的に医療を提供できるようになるでしょう。

今回、医療過疎地を訪問し、病気の人を助けるという医療の本質と、日本がいかにかまれているかを再認識しました。医療人として大変意義のある体験だったと思います。医療キャンプに参加する機会を与えて下さった関係各位に厚く御礼申し上げます。